

「罪に陥る」

2020年10月16日

女が見ると、その木は食べるによく、目には美しく、また、賢くなるというその木は好ましく思われた。彼女は実を取って食べ、一緒にいた夫にも与えた。そこで彼も食べた。すると二人の目が開かれ、自分たちが裸であることを知った。彼らはいちじくの葉をつづり合わせ、腰に巻くものを作った。(創世記3章6節～7節)

エデンの園に、神が造られた野の獣の中で、最も賢い蛇がいた。蛇は誘惑するものとして登場している。蛇とは何なのか。神が良しとして創造された世界に、蛇のような「悪」に誘う存在がある。悪は「欲」を起源としていると思えるが、その「悪」は「自由」が生み出すと言えるのではないか。人間は対話する存在として創造された。人は神に従う機械仕掛けのロボットではなく、自由が保障されている。自由は、神に従う自由と離反する自由、また、隣人を愛する自由と憎む自由である。この自由につけ込んで、神に離反し、隣人を憎むことに誘い込む「悪」がある。蛇は女に「神は本当に、園のどの木からからも取って食べてはいけないと言ったのか」と、禁止はどの木も含んでいるのかと問い質した。女は「私たちは園の木の実を食べることはできます。ただ、園の中央にある木の実は、取って食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないからと、神に言われたのです」と答えている。神はアダムに善悪の知識の木の実を「取って食べると必ず死ぬ」と言われたが、女はアダムの言葉を薄めて過少に聞いて、答えている。すると蛇は、「いや、決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っているのだ」と、食べるように、巧みに誘惑する言葉を発する。女が見ると、食べるによく、目には美しく、賢くなるに好ましいと、一気に魅惑された。そこで、実を取って食べ、一緒にいた夫にも与えた。最初に食べた女がより罪深いという評価もある。聖書では、女性を罪深い者と見なす記述が多々あるが、女性蔑視の影響であろう。女と夫はあくまで共同責任である。食べた二人は目が開かれ、自分たちが裸であることを知り、いちじくの葉で覆い隠した。今までは、裸でいても、恥ずかしくなく、受け入れ合っていたが、善と悪の知識が入り込み、恥ずかしく、隠すようになった。互いの間に、亀裂が入るようになったのである。その日、風の吹く頃、彼らは神が園の中を歩き回る音を聞いた。人と妻は、神の顔を避け、木の中に身を隠した。神は「どこにいるのか」と呼びかけた。彼はあなたの足音が聞こえ、私は裸なので、怖くなり身を隠しましたと答えた。今までは、神が通りかかると、飛び出て会話を交わしたが、今は、神から身を隠したいと思う心が変わった。神は、取って食べてはならないと命じた木から取って食べたのかと問うた。人は「あなたが私と共にいるようにと与えてくださった妻が木から取ってくれたので私は食べたのです」と、神が与えてくださった妻に勧められたので食べましたと、責任は神に、また妻にあるかのように答えている。神は女に「何とやることをしたのです」と詰問すると、女は「蛇がだましたのです。それで私は食べたのです」と、与えられた自由を用いて選り取ったのに、蛇に責任を転嫁し、自分を正当化している。善悪の知識の木の実を食べてからは、神との喜びに満ちた関係から逃れようとし、自分の責任を他者に転嫁し、自己正当化し、以前と全く変わってしまった。神との、また、隣人との関係を断ち切ってしまい、死ぬべきものとなった。代々の教会は、神の禁止を犯した人間の罪に陥った姿を「原罪」と捉えた。ここから、罪を負う歴史が展開されていく。